落第騎士の英雄譚～紅の前奏曲～

くろから

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

東方黒龍録～歴史に残らぬ物語～の外伝になります

こちらはあちらの物語との関わりが深い物語となっています

これは、剣士の世界に舞い降りた「血塗れの悪魔」の物語

目次

始まり、 1
魔女との出会い 6
殺し合い 12
目覚め 17

始まり、

綾辻海斗「ん？なんだ？子供の泣き声か？」
公園の片隅にから聞こえた鳴き声にしたがって歩けば、そこには紫色の髪の赤子がいた
海斗「捨て子か、ひどいことをするものだ」
～綾辻家～
綾瀬「だぁ～♩」
海斗「おうおう、どうどう」
海斗「さて・・・・勢で連れてきてしまったが、どうしたものか」
海斗の手には先ほどの不思議な赤子が抱かれていた
海斗「まず名前を決めねばな、ん？これは・・・・」
赤子の肩甲骨のあたりに刺青が見えた
海斗「これは・・・・刀と、天に登る龍か？」
海斗「刀で覇道をゆく、か」
海斗「ならば、お前の名は『綾辻　刀覇』だ」

～～～～数年後、刀覇が小学校入学直前の出来事
刀覇「親父！綾瀬は？」
海斗「見つからん！全く、いったいどこの誰が・・・・・」
刀覇「そっか・・・・じゃあ、俺は少し友達と遊んでくるから」
海斗「そうか、暗くなる前に帰ってこい、・・・・・危険なことはするなよ」
刀覇「・・・・・」
刀覇は何も言わずに長い髪を翻して走り出した
～～～～～
刀覇「くそっ、どこだ・・・・・」
ふりしきる雨の中、町中で刀覇はそう愚痴た
綾瀬「やめて！」
ヤクザ1「騒ぐなガキが！」
刀覇「！」
裏路地から綾瀬と中年の男の声が聞こえた
綾瀬が中年の男に殴られる
綾瀬「ガハッ」
刀覇「取り敢えず親父に連絡を・・・・って携帯がない」

ヤクザ2「どうしますか、このメスガキ」
刀覇は取り敢えず様子を見ることにした
ヤクザ1「変態どもの慰み者にして、凌辱されてる動画をあの道場に送りつける」
刀覇の顔から表情が消え失せ、心に何かドス黒いものが流れ込んでくる
ヤクザ2「なるほど、アノジジイの絶望する顔が目に浮かびますね」
刀覇「オイ」
ヤクザ「「アァン!?」」
刀覇「なぜそんなことをする?」
ヤクザ1「聞いてたのか、当然だろ?頭をしょっ引いた代償は支払ってもらはないとなぁ」
刀覇「テメェ!!」
綾瀬「刀覇!やめて!このおじさんたち抜刀者よ!」
ヤクザ1「見られた以上生かしてはおかないなあ」
そう笑いながら言うと刀型の霊装を顕現する
ヤクザ1「ハアッ!」
綾瀬「いやあああああ!!!!!」
綾瀬は刀覇が切り捨てられるのを想像して目を瞑る

が、しかし
キィィィィィン
綾瀬「え・・・・？」
恐る恐る目を開けてみるとそこには刀型の霊装を顕現し、ヤクザの霊装を受け止める刀覇の姿があった
ヤクザ１「その歳で霊装を顕現できるだと・・・・?!それに・・・・なんだその魔力量は!?」
ヤクザ２「生意気なっ！」
もう一人のヤクザも霊装を顕現し、刀覇に襲い掛かる
しかし、それを刀覇はあろうことか、もう一つ斧槍型の霊装を顕現し、受け止めた
ヤクザ２「ありえねぇ、霊装を二つ持ってるですって?!」
刀覇「さア！たぎってきたぜ！」
刀と斧槍の異形の二刀流だったが刀覇は槍を地面に突き刺し、こう言った
刀覇「お前らのような外道にはこいつだけで充分だ」
ヤクザ「なにおっ!!」
しかしヤクザが反応する前に刀覇が刀を天に向かって張り上げながら近づき、大上段からの一撃を見舞う

その一撃はとっさの防御を切り崩し、ヤクザの体制を崩す
ヤクザ2「グッ！」
その後間髪入れずに全く同じ軌跡の斬撃が見舞われた
体制を崩した状態では受けることができず、そのまま脳天から切り裂かれる
ヤクザ1「うおおおおおおお!!」
残心している間にもう一人が襲い掛かるが、待っていたとばかりに刀覇は振り向き拳打を放つ
肘打ち
掌底
そして、背撃
一息の間に放たれた三連撃によって肋骨を粉砕され、吹き飛ぶ
ふらふらと立ち上がると、刀覇は突きの体勢を取っていた
刀覇「修羅道・大忍び刺し」
そして刀覇は一瞬の間に間合いを詰め、突きを放ちヤクザを踏み台に飛び上がる。
そして背後に舞い降り、ヤクザがの喉を刺し穿つ刀を引き抜くと血が吹き出す
2人分の血でコンクリートは真っ赤に染まり、返り血を浴びた刀覇の姿はまるで血塗られた戦場に立つ悪魔のようだった

魔女との出会い

そんな事件がありながらも、現場に偶然あった監視カメラに相手が先に霊装を出していたことと、相手が有名な暴力団のナンバー2と3だったため、厳重注意だけで済んだ

因みに相手の抜刀者ランクはCで、霊装を発現させたばかりの小学校に入る前の子供が倒せるはずのない相手だったので、日本の関係省庁では密かに綾辻刀覇はこう呼ばれることになる

『真紅の悪魔』と

そして、その時間の後変わったことが一つあった元々刀覇は綾辻一刀流を学んでいたが、その日から稽古で見せた動きが全く違ったものとなった、まるで体に染み付いたのかのような動きは海斗を驚かせた、しかし

海斗「おい、刀覇、」

刀覇「なんだい、親父」

海斗「その剣は俺が許可するまで使うな」

刀覇「・・・・・なぜ?」

海斗「お前の剣は強い、それこそ異常なほどに、才能も有る、中学校上がる前に綾辻

一刀流の奥義も習得できるかも知れん、だがその剣は危険すぎる、お前の剣術は唯々大量の人間を殺すため、目標を殺すためだけの剣だ、そんな剣は子供が使うもんじゃない、おまえは嫌でも戦いの中に身を置くことになるだろうが、それまで牙を隠しておけ」

そして、刀覇は綾辻一刀流を学び、中学校に上がる前に奥義である、「天衣無縫」を習得した

そして中学校に入学前にして初めての抜刀者の大会である運命の出会いをすることになる

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

司会者「レディィィィィィィィィスエェェェェェェンジェントルメェェェェェェンボーイズアンドガールズ！さあさあ今回の試合はBブロック最大の注目カード、由緒正しき黒鉄家令嬢であり、あの黒鉄王馬の妹である『深海の魔女』Bランク、黒鉄珠雫と本大会初登場！しかしてこれまで相手を一刀の元に屠ってきたあの『最後の侍』の秘蔵っ子、Bランク、綾辻刀覇！」

司会者「試合は大会ルールにのっとり幻想形態で行われます！」

珠雫「これまでの敵は正直つまらなかったの、あなたは少し骨がありそうですね」

刀覇「その鼻っ柱すぐへし折ってやるぜ」

珠雫「いくわよ、宵時雨」

刀覇「いくぞ、鏖魔」
双方霊装を顕現し、試合がスタートした
最初に動いたのは刀覇、自身の得物の間合いに入れるため走り出す、
が、それをさえぎるように珠雫の周りで精製された氷がマシンガンののように放たれ、出鼻をくじく、
ここまできて珠雫は少し驚いた、ここまでの試合でこの氷の弾幕に対応できた人間は一人としていなかったからである、しかしそれだけ、相手は魔術で反撃してくることもない、このまま押し切れる・・・そう思ったとき弾くことに専念していた刀覇が空いている手を珠雫に向けた
すると刀覇の周りで氷が精製され、打ち出してきた
珠雫「?!」
一瞬の動揺で魔力制御が乱れ、弾幕が薄くなる
その隙を見逃さず刀覇が肉薄する
珠雫「くっ！緋水刃！」
大気中の水分を集め、宵時雨の刃を延長し迎え撃とうとするが、大上段に張り上げられた刀覇の刀を見て、
珠雫（これは防いじゃいけない）

そう考え全力でバックステップをする
次の瞬間振り下ろされた刀はステージを抉り飛ばした
もし受けていれば緋水刃ごと叩き伏せられていただろう
刀覇「お前、なかなかいいぞ」
珠雫（なかなかいいぞ・・・ですって?冗談じゃないわこちらは抜刀絶技を使ったのにあちらは使っていない・・・しかもどんな馬鹿力と魔力量よ、さて、どうしようかしら）
その思考が仇となった、
刀覇「迷ったな?」
その言葉で現実に引き戻され、抜刀術の構えをとる刀覇を見て珠雫は氷の弾幕で迎え撃とうとするが、
刀覇「遅い」
ステージを抉るほどの踏み込みは珠雫の反応速度を容易に凌駕し、体躯を十文字に切り裂いた
人間道　十文字
刀覇「迷えば、敗れる・・・」
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

その後、刀覇はというと決勝トーナメントで上級生に敗北した、剣技では優位に立っていたが、抜刀絶技を防ぐことができなかった、そして

刀覇「あーくそ、勝てねーか」

綾瀬「剣術だけでここまで勝ち上がれるんだから十分すごいわよ？」

珠雫「貴方が綾辻刀覇であってるわよね？」

刀覇「？」

綾瀬「お互いに顔も覚えてなかったの？」

珠雫「何か問題でも？」刀覇「別いいだろ」

綾瀬「はあ・・・それで？黒鉄家のお嬢様が何の用なの？」

珠雫「聞きたいことがあるの、なぜ私との試合で抜刀絶技を使わなかったのでしょうか？まさか使えないなんてことはないですよねぇ？」

刀覇「いや、そのまさかだ」

珠雫「え？」

刀覇「俺の抜刀絶技は存在しない、そもそもどんな能力なのかも分かってないんだ」

珠雫「じゃあ、私に氷で打ち返してきたあれはなんなのよ」

刀覇「やろうと思ったらできた、でもあれは多分俺本来の能力じゃないそれはわかる」

珠雫「それに、もう一つの固有霊装を使わなかった理由を言ってください」

刀覇「それはなー使う必要もなかったから使わなかったとしか」
珠雫「そうですか、必ず次会ったときには私が勝ちます」
刀覇「次も俺が勝つ」
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
そして中学校入学、しかし
珠雫「「なんで同じクラスなんですか・なんだよ」」

殺し合い

どうしてこうなった

その一言に尽きる

珠雫「なぜよりによって彼方が同じクラスなんですか」

刀覇「そりゃこっちの台詞だ」

珠雫「まったく・・・たのしい学校生活になりそうね」

～～～～

授業をそつなく（雰囲気は最悪だった）こなした2人は、放課後になるとまた話し始めた

珠雫「私の家まで来なさい」

刀覇「なんだよ」

珠雫「勝負よ、前は油断した、あんな稚拙な魔法で同様で意表を突かれたから負けたんです、叩き潰してあげます、光栄に思いなさい」

刀覇「そっくりそのまま返してやるよ」

珠雫「でかい口を！」

～黒鉄家、道場～

赤座「おぉ、珠雫さん、とそいつは・・・あぁ、この前の大会で負けた男ですかい、貴方は、今の黒鉄家で一番の才能のな持ち主ですからねぇ、こんな非抜刀者に育てられたようなガキに負けてもらっちゃこまるんですよ」

珠雫「お世辞はやめて、赤座、言われなくとも何もさせずに叩き潰します」

刀覇「・・・・・負けたことがないのか？」

珠雫「ええ」

刀覇「そうか、弱いな、お前、自分の才能便りか、」

刀覇「一つの刃、しかも研ぎ澄まされていない刃など取るに足らない、だが、お前あはあた偶然得ただけの力を信じすぎなんだよ」

珠雫「ずいぶんと言ってくれますね、そんなに私の水で切り裂かれたいですか？」

刀覇「はははははははは、だが俺とお前にも共通点が一つだけある、全力を出す相手に困ってたってことだ、全力を俺は出したことがない、恐らく出せない、今ここでも、だけどお前ごときとやりあうには十分だ、見せてやる、親父の綾辻一刀流は人を守る

ための術理、活人剣と言ってもいい、だが俺の目覚めた術理は違う、いや、焼きついてたのか？そんなことはどうでもいい・・・・いつも夢を見る・・・・クソみたいな夢だ・・・だがその中で！一つの剣が暗い光を放ってた・・・まだ全部掴えてはないが、特

別だ、魅せてやる、俺が夢で歩んだ道、六道を！」
珠雫「ならばその道、ことごとく踏みにじってあげましょう！飛沫け！宵時雨！」
刀覇「鏖せ！鏖魔！」
門下生「まずい！あいつら本気で殺しあう気だ！止めろ！珠雫様をお守りしろ！」
刀覇「覇ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！渇ぁ！！！！」
ダァァァァァァン！！！！
刀覇の体から剣気が放たれ、珠雫以外の人間は全て吹き飛んだ！
珠雫（やはり魔力量が多い・・・だがそれを生かせないのなら！遠距離から！）
一つ一つが銃弾に等しい威力の水弾が放たれる
刀覇「弾膜がぁ！薄っすいんだよぉ！」
修羅道　塵旋風・削ぎ
凄まじい勢いで螺旋状に切り刻み、水弾を霧に変えながら弾幕の中を突き進む
珠雫（彼が使っている魔術らしい魔術は一つもない・・・あるとすればそれはただの魔力をまとうことによる身体強化！それ以外は全て彼の技術ですがそていどは）
しかし今度は珠雫も冷静に身体能力を強化し距離をとりながら次の抜刀絶技を放つ
抜刀絶技　白夜結界
切り散らされた水を気化させ霧を作る

修羅道　木枯らし颪
刀覇は体を回転させ竜巻をおこし霧を吹き飛ばそうとするが珠雫の魔力の干渉により吹き飛ばせない
抜刀絶技　青色幻夢
珠雫「ありがとうございます、水を散らしてくれて、これで貴方は終わりです」
自らは霧の中で光の屈折を操り、消えながら言う
抜刀絶技　血風惨雨
全方位から糸状の水が刀覇に襲い掛かる
修羅道　木枯らし颪
もう一度すべての針を切り散らすがすぐに針となって襲いかかるが、針が再生するよりも早く刀覇は次の技を放った
修羅道　塵旋風・削ぎ
その技はまったく見えていないはずの珠雫に向かって一直線に突き進んできた
珠雫「!!!」
しかし、珠雫は寸での所で反応し難を逃れ、服を切り裂くにとどまる
珠雫（なんてやつ、ほとんどこの常に流動する空気の中で気配だけで私の居場所を見つけるなんて）

刀覇「がぁっ!!!!」
刀覇は床を踏みつけまた魔力を放出し、霧を力技で吹き飛ばした
刀覇「久しぶりに血が滾ってきたぜ！こいつで仕舞だ！死ぬなよ！
我が血に宿る
皇の力よ、
暗き血の閃きを、

魅せよ
神槍　ドライブニル」
瞬間襲い掛かる重圧に珠雫の体が本能的に固まる
畜生道　牛魔突
珠雫の強化された視覚能力をはるかに超えた突きが左胸を消し飛ばし風穴を開ける
珠雫・刀覇「ゴポッ・・・・」
両者が吐き出した大量の血と共に勝敗は決した
引き分けという形で
突きを放つ瞬間の一瞬に刀覇の首の動脈は切り裂かれていたのだ

目覚め

ＩＰＳ再生槽の中で珠雫は目覚めた、隣には刀覇が眠っていた

珠雫「・・・・・私は・・・・」

???「勝負は珠雫の負けだよ」

珠雫「!?母さん?」

珠雫母「まったく、幻想形態でやればいいものを、まさか、そのままやるなんて思わなかったわ」

珠雫「わたしの・・・・負けですか」

珠雫母「泣きの一回でも完膚なきまでに負けたんだから、その子を認めてあげたら?」

珠雫「・・・・・」

刀覇「んあ・・・・んん!?なんだこれ!?」

珠雫母「あら、おはよう」

刀覇「『おはよう』じゃねーよ!あの時邪魔したのあんただろ!?」

珠雫母「大事な娘の命が危なかったんだよ、すまないね、あれで満足できなかったなら其の生意気な口とおさらばしておくかい?」

非常に凄みのある笑みだ
刀覇「・・・・」
気おされて刀覇も押し黙る
珠雫母「でもよかッたよ、珠雫がライバルになれるような子にあえて、娘の天狗をへし折ってくれてありがとうね」
刀覇「いや・・・俺邪魔が入らなければ勝ってたはずなんだけど・・・」
珠雫母「黒鉄の娘が、負けたままでいると思うかい？しかも私の娘は伸び白が多いんだ、すぐにキミに追いつくよ・・・コホッ」
親バカである
珠雫「！大丈夫ですか？」
珠雫母「ふふふ・・・すまないね・・病人の身にはちょいと無理が合ったらしい・・・・さて、そろそろ使用人が気がつくころだ、戻らせてもらうよ」
そう言うと、ゆらりと彼女は歩き出した
刀覇「母親、か」
珠雫「そうよ、父親と違って私たちをちゃんと気にかけてくださる、なんで父ではなく母さんがあんな・・・・」
刀覇「不治か」

珠雫「遺伝性の病気だそうで、延命しかできないそうよ」
刀覇「そっか」
珠雫「もっと、稽古つけてもらいたかったのに・・・・」
刀覇「魔術はあの人仕込みか」
珠雫「そう、よく、私の才能を褒めてくださったわ・・・『魔力制御がうまい』って、私の体は武術には向いてないから」
刀覇「いや、」
珠雫「え？」
刀覇「攻めるにゃ確かに魂装も体つきも向いてねーけど、やりようはある、小太刀ってのは守りに向いた武器だ、其れに刀の間合いのさらに内側に入っちまえばリーチの短さも帳消しにしてメリットにできるし、」
珠雫「魔術だけでは貴方みたいなの負けることもあるかも」
刀覇「先に言うな、戦いで生きるにゃ一芸に特化するなら極限まで極めることになるが、そうすると大体弱点も分かりやすくなる、と俺は思ってる」
珠雫「そういえば貴方も近接一芸特化よね」
刀覇「師匠がいないしなぁ、其れに能力もわかんねーし」
珠雫「私が教えてあげる、代わりに貴方の技術を私に教えなさい」

刀覇「この後に及んで命令形かよ!・まあ、いいよ、得るものも多そうだ」